

High - Light Scene

大洲 大作

竹中 美幸

中島 麦

平田 剛志(企画)

2016年5月4日[水・祝] - 5月22日[日] 11:00~19:00 月曜休廊・金曜日は20:00まで・最終日は18:00まで

協力:サイギャラリー、Gallery OUT of PLACE 助成: Arts Support Kansai

関連イベント

[Open Draw-ing] 2016年5月4日[水・祝] 12:00~18:00

出品作家・中島麦による会場制作。

[High - Light Talk] 2016年5月22日[日] 16:00~

大洲 大作、竹中 美幸、中島 麦、平田 剛志によるトーク。

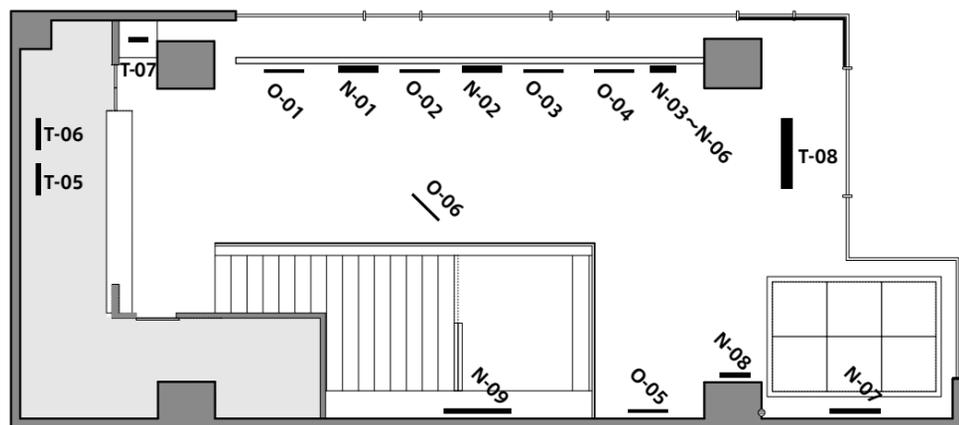
本展「high-light scene」は「ハイライト」をテーマに、3人のアーティストの作品を通じて光と風景について考察する展覧会です。

「ハイライトシーン」とは、映像や放送番組で最も重要な、または感動的な部分や場面を指す言葉として使われています。映画やドラマ、演劇やコンサートからスポーツまで、ハイライトシーンには一瞬間の見どころが凝縮されています。私たちはこれら「ハイライトシーン」を見ることで、本編をすべて見なくても映像の抜粋、部分、断片を通じて、物語や試合などの内容や結果を理解することができるのです。

「ハイライト」とは、もともとは光のあたった最も明るい部分を白や黄色の絵具などで浮き立たせる技法を意味する絵画用語です。そう、「ハイライトシーン」とは映像よりもすでに絵画や写真などのメディアにおいて表わされていたと言えるでしょう。そこで本展では、大洲大作、竹中美幸、中島麦の3人の作品に見られる「ハイライト」に着目します。

三人の作品は、絵具という物質によって造形化された「光」であり、写真やフィルムに刻印された「光」です。しかし、そこに現われる「光」は、表象・記録された「光」でありながら、断片的、部分的、抽象的な形象へと還元された光でもあり、絵具や紙、フィルムや印画紙の光沢など、メディウムがもつ「光」と溶け合ってもいます。どうやら「ハイライト」には、フォルムとアンフォルム、再現性と物質性という二面性があるようです。本展では、このようなハイライトが有する二面性を3人の作家の作品により「ハイライト」シーンを編集・構成する空間となるでしょう。

平田 剛志(企画)



大洲 大作

O-01 夏の光 I	2016	Inkjet Print	648 x 864mm
O-02 春の光 I	2016	Inkjet Print	648 x 864mm
O-03 冬の光 II	2016	Inkjet Print	648 x 864mm
O-04 夏の光 II	2016	Inkjet Print	648 x 864mm
O-05 春の光 II	2016	Inkjet Print	648 x 864mm
O-06 passed rays	2016	Slide Film, Projector	サイズ可変

竹中 美幸 (T-01~T-04は、1階入り口ライトボックス部分展示作品です。)

T-01 水面の宇宙	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	255×216×40mm
T-02 眩い闇	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	205×156×40mm
T-03 untitled	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	156×205×40mm
T-04 titles 3	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	216×255×40mm
T-05 titles 1	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	370×510×55mm
T-06 titles 2	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	510×370×55mm
T-07 水に映る影	2015	35mmフィルム、アクリル板、他	216×255×40mm
T-08 光 / 闇	2015	35mmフィルム、アルミ板、他	1300×200×2260mm

中島 麦

N-01 WM -High-Light no.3	2016	acrylic on canvas	91×72.7×5cm
N-02 WM -High-Light no.2	2016	acrylic on canvas	91×72.7×5cm
N-03 WM -RGB no.3/2016	2016	acrylic on canvas	27.3×45.5×4cm
N-04 WM -RGB no.2/2016	2016	acrylic on canvas	27.3×45.5×4cm
N-05 WM -RGB no.1/2016	2016	acrylic on canvas	27.3×45.5×4cm
N-06 WM -RGB no.4/2016	2016	acrylic on canvas	27.3×45.5×4cm
N-07 WM -High-Light Scene no.2	2016	acrylic on canvas	130.3×80.3×5cm
N-08 WM -gold/2016	2016	acrylic on canvas	41×41×4cm
N-09 WM -High-Light Scene no.1	2016	acrylic on canvas	130.3×80.3×5cm

High-light Scene

そこに、かつて光があった／水晶体が像を結ぶやわらかな焦点面に／フィルムの奥に、印画紙の底に、均質なセンサの素子の谷間に／車窓を過ぎる光、翳る室内に差す光、季節の空を舞う光／つかの間の光が烙印を刻んだあと、感材に残る波の痕跡／すべては光にさらされ、それぞれの反射を返し、闇へと消えてゆく／時の中に折り重なるハイライトとシャドウのあわい／滑り込む眼をまなざしが追う／ひとみ焼き付くまで光、光／

Daisaku Oozu

大洲 大作

Oozu Daisaku

1973年、大阪市生まれ。横浜市在住。列車などの車窓にうつろい滲む、営為をうつす光そして影を掬い上げる《光のシークエンス》、また《Afterglow》などの作品を制作している。

主な展覧会に、「Afterglow」(個展, POETIC SCAPE, 2016年)、「Fly me to the AOMORI 青い森へ連れてって」(青森県立美術館館外企画展, 2015年)、「光路 -Optical Path-」(サイギャラリー, 2015年)、「光のシークエンス」(個展, ギャラリー・バルク, 2014年)、「Waiting for the first train 始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー開館記念企画展, 2012-2013年)、「INVISIBLESCAPES」(個展, galerie son, 2012年)、「NO MAN'S LAND」(個展, サードギャラリーAya, 1999年)など。2016年秋、さいたまトリエンナーレに出展。

High - Light scene

今回展示した作品「光 / 闇」は、目を開いても閉じても闇がみえる完全暗室の中、35mm映像用フィルムをいくつもの色の光によって感光させた作品です。真っ暗闇のなかで光を捕えようとした結果、透明な光の跡の重なりは、かたちなき闇のもやのように現れました。

また、かつて様々なシーンを、光を浴びスクリーンに投影していたフィルムは、いつしか消えそうなメディアとなってしまいました。

本来動くべき映画のフィルムを静止させ、光を、闇を、フィルムの存在をもとどめ、現在の景色や光と共存する場をつくりたいと考え制作しました。

Miyuki Takenaka

竹中 美幸

Takenaka Miyuki

1976年、岐阜県生まれ。2001年、多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業。2003年、多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。

主な個展に、「冬の前日」(トーキョーワンダーサイト本郷/東京・2004年)、「柔らかな風景」(アートフロントグラフィックス/東京・2009年)、「トーキョーワンダーウォール都庁2010」(東京都庁第一本庁舎3階南側空中歩廊/東京・2011年)、「鮮やかな残像」(新宿眼科画廊/東京・2011年)、「竹中美幸展」(極小美術館/岐阜・2012年)、「transparency」(アートフロントギャラリー/東京・2012年)、「闇で捕えた光」(アートフロントギャラリー/東京・2013年)など。

主なグループ展に、「フィリップモリスK.K.アートアワード2002」(東京国際フォーラム・2002年)、「トーキョーワンダーウォールの作家たち展2000-2003」(東京都現代美術館・2004年)、「VOCA展2012 -新しい平面の作家たち-」(上野の森美術館・2012年)、「シェル美術賞展2012」(国立新美術館・2012年)、「みづゑの魅力 -明治から現代まで-」(平塚市美術館・2013年)、「篠原資明企画 超少女まぶさび宇宙 竹中美幸・寺田就子」(ギャラリーキャプション/岐阜・2015年)など。

主な受賞歴に、2001年・「ノキアアートアワードアジアパシフィック2000」アジア第3位、2010年・「トーキョーワンダーウォール2010」ワンダーウォール賞、2011年・「第4回アーティクル賞」準グランプリ、2012年・「シェル美術賞」島敦彦審査員奨励賞など。

High-light scene

私の絵は、ひと振りひと振りのハイライトの痕跡で出来ている。「WM」(ウム)と題した平面作品は「有無」をテーマとしている。垂直方向への重力を有する痕跡を画面に残そうとした秩序だった行為と、コントロール出来得無い混沌、2つの痕跡が画面の中に存在している。また現場で制作するドローイング作品は、大洲大作氏のスライド写真を流れ去っていく日々の風景に見立て、描く事によりそのエッセンスを切り取り、集積していく試みである。私の生きている毎日がささやかな、でも確かなハイライトシーンの集積で出来ているように、有無から立ち上がるハイライトこそ、絵画の醍醐味ではないだろうか。

nakajima mugi

中島 麦

Nakajima Mugi

1978年、長野県生まれ、大阪育ち。2002年、京都市立芸術大学美術学部油画専攻卒業。

絵を描く事を中心に、そこから拡張する出来事を取り込みながら活動中。近年は2つの異なる要素を対比・補充関係とする抽象絵画を制作。その構造を通して、私自身が何ものからも自由で、何ものをもつなくメディウムでありたいと考えている。

近年の主な個展に、MuMu Gallery 木木藝術/台湾・2016年、ギャラリー編・かのこ、及び周辺の街/大阪・2015年、Gallery OUT of PLACE TOKIO/奈良・東京・2014~15年(13年、11年)、KITAHAMA N BLDG./大阪・2014年、エスプリヌーボーギャラリー/岡山・2014年(12年、10年)、阪急メンズ大阪/大阪・2014年、GLAN FABRIQUE ギャラリー "la galerie" /大阪・2014年、奈良町現代美術館/岡山・2012年、サクラアートミュージアム/大阪・2012年、ギャラリーはなうさぎ/京都・2012年(05年、08年、10年)など。

主な展覧会、「美作三湯芸術温度」(湯郷グランドホテル/岡山・2016年)、「ART KAOHSIUN」(高雄藝術博覧会・2015年)、「学園前アートウィーク2015」(浅沼記念館学園前/奈良・2015年)、「下町芸術祭-ウイズベインター」(神戸市地域人材派遣センター・アスタくにつか空店舗/神戸・2015年)、「トランス・アーツ・トーキョー」(神田五十・十八通り各所/東京・2015年)、「未生流[もう一度いけば]お花とコラボレーション・ライブペインティング」(大阪 ザ・シンフォニーホール・2015年)、「ART OSAKA 2015」(ホテルグランピア大阪・2015年・11年・12年・13年・14年)、「Asia Contemporary Art Show Hong Kong」(2015年)、「景色・描く・奏〜茨木音風景〜」(茨木市立生涯学習センターきらめきホール/大阪・2014年)、「HUB-IBARAKI ART COMPETITION・BEYOND〜コチラとムコウin茨木〜 公開制作・作品設置」(茨木市立生涯学習センターきらめき/大阪・2014年)、「Worldmaking "100年前の空"より」(2kw gallery・2kw58/大阪・2013年)、「slideshowstudies(SSS)ドロームービー」(つくるビル/京都・2013年)、「HANARART2012 こゝ 「記憶」をゆり動かす『いろ』」(旧川本邸/奈良・2012年)など。

